

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。

# つ の ぶ え



社会福祉法人

## 小羊学園

〒433-8105

静岡県浜松市北区三方原町 2709-12

電話：053-414-1833 FAX：053-438-7707

E-mail kohitsuji@imix.or.jp

H.P http://www.kohitsuji.or.jp/

発行人：稲松 義人

印刷所：S R S株式会社

定 価：一部 30円

2013年2月20日

### 第 358 号

古い船を今動かせるのは  
古い水夫じゃないだろう  
つばさ静岡事務局長 羽山 純

毎年4月に新しい職員を仲間として迎えます。また、在職している職員も気持ち新たに作る時期ではないでしょうか。そんな時期に、あらためて自分たちが何をしたくてここ（障害児者福祉の現場）にいるのだろう、と考えることにしました。

小羊学園が支援している人たちは比較的障害が重いといわれる人たちです。彼らは、今の社会で生きていくことに多くの困難があり、そのために特別な配慮が必要な人たちです。命や健康を守るために眠ること、食べること、さらに日々の暮らしの中で安心感を得、楽しみや喜びを感じることに。利用者がそんな普通の暮らしをしていくために、一人ひとりにあったオリジナルな方法を見つけ、それを自然にできるように身に付けることが職員に求められます。特に就職したてのころは、覚えること、習うことが山ほどあって、就職してしばらくはそのことに没頭しなければならぬでしょう。私のような、生意気な人間は、「何でこんな当たり前のことをするために、こんなに細かいことを覚えなければいけないんだろう?」と思ったものでした。こんな細かいマニュアルを身につけることで本当に利用者の暮らしを支援することになるの

だろうかと、

日常を過ごすために細かい決め事なり配慮が必要なことは前述したとおりです。それを体にしみこませることがいわゆる修行というもので、そういう時代をすごすことが、人生にとって必要なことらしいと、私は最近になって後悔と共に悟ったのですが。

今にして思えば、決まりきったルールだと思っていたものが、微妙なニュアンスや豊富なバリエーションを含んだものだということ、そして、身辺介護や環境整備というような仕事の中に利用者とかかわりを深める大切なことがたくさんあることがわかります。ですから、マニュアルを身に付けてそれをきちんとこなすことが自分たちの役割である、という風に思う人には、マニュアルにある知識と技術を身につけたことはゴールではなく、そこが本当の出発点だということを強調したいと思います。

日常的な支援について、「自然に体が動く」ようになると、あらためて、より多くのことを彼らと共有したくなります。利用者と取り結ぶ関係は、先輩と後輩、経験年数などを超えて職員それぞれの個性が大きな意味を持つようです。上手にかかわる職員をうらやましく思い、自分も何とかそこに近づきたいと思って試行錯誤することになります。

利用者の思いを分かろうとして分からないことのほうが多く同時に、分からないながらも「分かるような気もする」という気持ちも捨てがたいのです。それは、終わりにくいまま続いています。よくわからないことを分からないままに抱えていると落ち着かないものです。けれどわからないことを大事にして「ああでもない、こうでもない」と考え続けることもこの仕事の楽しみの一つだと思います。

「分かる」と「分からない」の間に「感じる」があるかもしれません。けれど、この「感じ」が、自分の願望の投影ではないと誰も保障してくれません。相手の気持ちを知りたいと思えば思うほどに自分の「感じ」は当てにならないものに思えて不安になる、というのは恋心と同じ?

つばさ静岡では、利用者の特徴的な場面のビデオを大勢の職員で見、その感想を出し合うことがあります。そうすると、たった一つの場面であってもさまざまな解釈が可能であり、そういういくつかの解釈を重ね合わせていくことで利用者の実像に近づいていくと思えるのです。そういう経験を通して自分の「感じ方」の癖や、職員同士「同じ悩みを持つもの」の連帯感や、利用者の思いに一步近づけたのではないかと思えるうれしさやらを感じています。それが私たちがここに居続ける理由だと思います。

\* 表題は「イメージの詩」(吉田拓郎)の一節です。若い世代に勇気を与えるものと高揚した気分を聴いたものです。

## 光り輝ける場所を願いつつ

浜北区尾野にある生活介護施設「オリーブの樹」は開設して7年が経過しようとしています。浜北区の日中活動の拠点として役割を担っているオリーブの樹について、日々の様子とこれからについてご報告いたします。

### 『工房わかぎ』の取組みから

施設長 鈴木 龍一

支援センターわかぎ（当時若樹学園）が、平成3年に地域自立促進作業所として開設したのが『工房わかぎ』。当時としては画期的な取組みで、『入所施設から通う』を大切にされた作業所でした。ここでは、地域の材木屋から頂いた、廃材を加工して自主製品を製作することを『作業』として取組んで、一日の大半の時間を作業に費やす、利用者にとってはやりがいのある『仕事』が提供されてきました。

作業を通じて、自主製品の『花台』や『工房わかぎ』の名前も地域の方々に知っていただけるようになり、在宅者の方々からの利用相談なども出始めてきました。そのような声を受けて、平成16年から工房わかぎにて『夏期デイ』を行い、夏休みに2週間ほど特別支援学校の子どもたちに施設を開放し、多くの方に利用していただきました。その保護者からも、卒業後の進路先の不安や、浜北地区に活動場所がないことなど、様々な相談を受けました。地



域の皆さまからの声を受けて、平成18年4月より、工房わかぎの中に、『障害者デイサービス・オリーブの樹』として通所施設を開所しました。開設当時は12名と少ない利用者との活動で、活動内容も工房わかぎの木工作業と一緒に進めていきました。

その後制度も、支援費制度から自立支援法に変わり、施設種別も『障害者デイサービス』から『生活介護』になり、利用者数も年々増加していきま

### 〜温かい物は温かく提供する〜

平成18年にオリーブの樹が開所して最初に取組んだことは、厨房設備の設置と食堂の整備でした。

『温かい物は、温かいうちに食べた』これは長年工房わかぎが、冷たい外注弁当を食べていたものを、より良いものにしていきたいとの思いから、給食が提供できるように環境を整えました。工房わかぎでも、なるべく温かい物を提供しようと、ご飯とみそ汁は自前で作っていたこともありまし

オリーブの樹が開所して、これまでのお弁当のスタイルから、セルフ式の給食になり、ラーメンやうどん・そば、おいしいデザートなど、今まで昼食で食べる機会がなかったものが、提供できるようになりました。また、イベントの時などには、手巻き寿司を行ったり、特別なメニューを楽しむことができました。



### 〜新しい日中活動への取組み〜

今では「オリーブの樹といえば、『パン』を作っている所」として知られるようになりましたが、開設当初はとてもそうになるとは想像が付きませんでした。

平成18年からは、工房わかぎの木工作業をそのまま取り入れて、日中活動を行っていましたが、若い利用者にはあまり興味がないようでした。

生産すること、地域のひととの関わりが持てる活動を展開したいと思い、パン作りを始めました。パンは、作ったその日に消費をしなくてはならないため、工程が一日で完結すること。また、買っていただく人とのつながりが持てる大きな利点でした。

職員は素人同然なので、最初から勉強して、粉をこねる作業から始めていきました。しかし、思うように形のいいパンができず失敗を繰り返していましたが、利用者は食べる物を作る楽しさを感じていて、木工作業の時よりも生き生きと活動に参加していました。準備期間に2年も費やしてしまい、平成21年10月やっと、『オリーブのパン』として営業を始めることができました。

現在は、保護者の皆さまや法人内事業所をはじめとして、地域の学童保育の皆さんからもご注文を頂いています。その他オリーブの樹では、リサイクル

ル作業（缶回収・缶つぶし）や、内職作業も行っています。また、昨年からは、作業だけでなく創作活動も取り入れ、ちぎり絵を作ったり、紙すきを行ったりして、作業とは違った活動も提供しています。

今後も個々の得意なことを生かせる活動の提供が必要だと思えます。



〜子どもの支援の必要性〜

平成16年から工房わかぎで行っていた、『夏期デイ』は平成20年まで行われ、夏期デイで関わった利用者が、卒業後はオリブの樹に通うようになるなど、早い段階から在宅で生活されている子どもたちと、関わることができました。

オリブの樹が、浜北区内に生活されている方を受けようになり、浜北手をつなぐ育成会との関わりも多くなりました。育成会からは、浜北特別支

援学校県立移管にともない、生徒数が増え、放課後支援をする事業所が不足している状況を教えていただきました。また、これから特別支援学校に通学する保護者との意見交換会も行われ、放課後支援の必要性を訴えていました。そのような地域の声と、工房わかぎでの夏期デイの実績を生かして、平成21年度より放課後支援を行うことにしました。

オリブの樹での放課後支援の目的としては、保護者の就労支援はもちろんのこと、重い障がいのある方たちと早い段階から関わることによって、コミュニケーションが持てるようになり、落ち着いた生活を送ることができるようになることです。多くの人と出会い、関わるることによって、コミュニケーションの楽しさを知り、その人らしい生活が送れるような環境を作ることが大切



平成24年度からは、放課後等デイサービス『わかかな』として、新しい出発をしました。

オリブの樹で行う子どもの支援は、ただ単に、放課後支援をするだけでなく、将来地域に出て生活される子どもたちを知ることについても、非常に意味のある取組みであると思えます。

〜今までとこれからの支援〜

オリブの樹の『樹』と、『わかかなの』『わか(若)』を合わせると『若樹』となります。2つの通所施設はいずれも、支援センターわかぎ(若樹)での取組みが形となったもので、入所施設にとどまらず、地域に貢献できる施設を展開してきたことを忘れないためにも、名前に『わかぎ』を入れました。

平成25年度を迎えると、開所から7年になります。今までは、施設で安心して生活ができるように、いろいろな形での支援を行ってきました。

また、開所したばかりの新しい施設でしたので、様々なことが軌道に乗るようになり、そして、利用される方が、楽しめる内容の活動が提供できるように、心がけて支援してきました。

これからは、今まで築いてきたオリブの歴史を大切にしながら、次のステップへ踏み出していかななくてはならないと思えます。

その一つとして、自立生活への取り組みがあると思えます。オリブの樹

の利用者は若い方が多く、たくさんの方の可能性を持っています。自分の生活を自分で見つけ、親に頼らない生活も考えていけるのではないかと考えています。保護者会でも「ケアホームを考える会」を立ち上げ、子ども達の自立に向けて、応援してくれています。

一人一人が自分の人生を選択し、実現でき、主体性のある生活が送れるようになればと思います。

小さな作業所で始まった取組みが、今は50人を超える利用者が通ってこられる場所になりました。まだまだ皆さんのご要望や、ご希望に添えていないことがあると思えます。

今までも少しずつ成長してきましたように、これからも皆さんの声を聴きながら、少しずつ成長していきたいと思えます。



### 現存建物お別れ記念 シンポジウム

支援センターわかぎ 小川 壽江

平成25年2月9日(土) 13時30分  
からなゆた浜北3階大会議室で『支援セ  
ンターわかぎ(旧若樹学園)のあゆみ  
〜わたしたちが受け継ぐもの〜』と題  
し、シンポジウムが行われました。

イベントとして、①支援センターわ  
かぎ改築の概要②シンポジウム③写真  
展を行いました。

来場者は91名。開設当初の職員の方  
や保護者の方など『若樹学園』時代を  
偲んでご来場されました。また、利用  
者を代表してケアホームに移行した3  
名の入居者も参加され旧職員と楽しげ  
にお話しされていました。

支援センターわかぎ(旧若樹学園)  
は建物の老朽化が進み、利用者の方々  
の安全や生活環境での問題点も多い状  
況から、改築を進めることとなり、平成  
24年度の耐震化事業での施設整備の助  
成が決まり、改築を行うことになりま  
した。解体工事が平成25年3月から始  
まることになった為、35年間過ごした  
施設に『お疲れさま』と『ありがとう』  
を込めて今回のお別れ記念シンポジウ  
ムを開催しました。

シンポジストに初代若樹学園園長の  
舟橋洋氏、旧職員の中村進氏(現上田  
いずみ園園長)をお招きし、現職とし

て松原施設長、小原事務長、古橋副施  
設長が登場しました。司会進行は羽山  
純(つばさ静岡事務長・旧職員)が行  
いました。

シンポジウムでは開設当初の話をそ  
れぞれの立場から見た『若樹学園』に  
ついてシンポジストの皆さんに発表し  
ていただきました。特に舟橋氏、中村  
氏のお話は、現在働いている若い職員  
には参考になったようで、35年の歴史  
を2時間で語るには足りず、『もう少し  
聞きたい』と思う職員も多かったで  
す。また、改築後の支援のあり方への  
提言もいただき、あっという間の時間  
でした。ホールには35年の歴史をパネ  
ルと旧職員の方から提供して頂いた写  
真の展示、DVDによる『若樹学園の  
生活』を放映しました。若かりし利用  
者の姿を観ることができ、懐かしんで  
いただけたと思います。



### 重症心身障害児者医療連携研究会

アグネス静岡 北尾会津

2月9日(土)に、つばさ静岡にて重  
症心身障害児者医療連携研究会が行われ  
ました。この会は、県立こども病院の医  
師やつばさ静岡施設長山倉医師が発起人  
となり、県内の医療関係者に呼びかけ、  
重症心身障害児者の医療支援のあり方を  
研究することや医療機関が連携を図るこ  
と等を目的に行われており、今回が4回  
目となります。

今回は、静岡富士病院療育指導室伊藤  
良氏から「措置入院児童の現状と課題に  
ついて」、藤枝市立総合病院小児科伊東  
充宏医師から「当院における重症心身障  
害児」という演題でお話がありました。  
また、静岡でんかん・神経医療センター  
小児科重松秀夫医師による「重症心身障  
害児者のでんかん」の講演もありました。

当日は、静岡県下の小児科の医師をは  
じめ、重症心身障害児者に係わる看護、  
リハビリ部門の専門職も多数の参加があ  
りました。また、医療関係者以外(日中  
活動事業所や相談支援事業所職員)の参  
加も、会を重ねることに増えています。  
私は、相談支援という立場で、重症心  
身障害を持つ人や家族と係わっています。  
ひとりひとりの暮らしを支援するために  
は、医療に関する知識や関係者とのネッ  
トワークが不可欠となっています。この  
会は、相談員である私にとって、とても  
心強い存在です。

### 小羊学園を支える会

#### 2012年度寄付金報告

1月受付分 413,000円(41件)  
累 計 5,143,708円(393件)

#### 小羊学園への寄付金振込み先

郵便振替口座 00800-8-107785  
口座名義 社会福祉法人小羊学園  
ゆうちょ銀行 089店 当座預金0107785  
口座名義 社会福祉法人小羊学園

ご希望があれば、郵便振替用紙をお送りいたします。  
下記へご連絡ください。  
小羊学園を支える会事務局(鈴木)  
三方原スクエア内 ☎ 053-414-1833

### 編集後記

先日マルカート利用者のTさんが急  
逝された。39歳の短い生涯だった。T  
さんは100kgを越す巨漢。巨人軍と  
お気に入りの女子アナの話をすること  
が好きだった。普段は温厚で、体格に  
似合わない柔らかな喋り口調は周りの  
人達を癒してくれた。最近では、年  
何回か顔を合わせるだけだったが、い  
つも私を温かく迎えてくれた。

今、改めてTさんに問うてみたい。  
「幸せな人生だったかい?」この問いは、  
彼らの人生と共に歩み寄り添えていた  
のか支援者としての自問自答でもある。  
ご冥福をお祈りいたします。  
まだ春の訪れは先のようにです。皆さ  
ま、お身体ご自愛くださいませ。(F)